



米川 康 応用理学部門（地質）

勤務先：明治コンサルタント株式会社

技術者は1つの技術を極めるべきでしょうか。それとも変化に対応すべきでしょうか。

先日、忘年会をしました。私が長年従事したダム建設の当時の仲間が集まったのです。みなさんバリバリのダム屋さんです。その中の若手（現在45歳）の代表が「ダムは自分が責任持つから、みんなは別のことをやってくれ。あとは任せろ」と言いました。その白くなった髭を見て、「土」だなと思いました。最近の私はトンネルの仕事が多くなりました。計画段階のトンネル調査と老朽化したトンネルの調査です。世間は狭いもので、トンネル業務でも、昔から親しい技術者を見かける方が多くなりました。仕事熱心です。軽い挨拶をすれば、もうそれで通じます。トンネルの仕事もまた、「あとは任せろ」と覚悟を決める技術者が出るのでしょうか。

私は、父が営林署に勤務していたため、子供の時から「自分はフィールドで仕事したい」と考えておりました。今のところ北海道を離れたことが無く、それゆえ北海道のために何か役に立ちたいという強い思いを持っております。しかし、もがいてばかりです。ビジネススクールにも行きました。そこでは日本全国の異業種の方と交流しました。元気です。勢いやスピードが違います。一緒にいると力をもらうことが出来ます。

この力を引き寄せる方法があるはずです。本を読みあさりしました。やはり「古典」と呼ばれる書物に行き着きました。いつの時代も栄枯盛衰はあります。その時代に応じて歴史は作られるのでしょうか。

「技術者は土台となる技術を持ち、歴史の流れで進化を目指す」ことが基本的なスタイルと思います。



次号は、亀山聖二さん（応用理学部門）



田中 淳 建設部門（港湾及び空港）

勤務先：社団法人寒地港湾技術研究センター

私は網走管内遠軽町で生まれ育ち、北見市で大学時代を過ごしました。高校・大学時代は剣道部に所属し、重さ10kgを超える防具を身にまとい汗を流しました。今では防具2つ分ほども体重が増加してしまいましたが、竹刀をラケットに持ち替え、休日にはテニスコートを動ける範囲で駆け回っています。

大学卒業後は、札幌にある北日本港湾コンサルタント(株)に入社しました。入社当初は、港湾の現地調査・解析、水理模型実験といった業務を担当し、その後、港湾計画を行う部署に異動しました。その中で国際海上コンテナ物流の業務に携わることになり、縁あって平成13年から、神奈川県横須賀市にある国土技術政策総合研究所（国総研）に交流研究員として出向する機会を得ました。約1年半の短い期間ではありましたが、北海道のみならず、国という大局的な視点からの国際物流に関する研究の一端にも携わることができ、非常に貴重な経験を積ませていただきました。

私は平成19年度の試験で技術士資格を得ることができましたが、これには会社の上司、先輩、同僚をはじめ、業務上あるいは国総研でお世話になった方々など、家族も含めて、たくさんの方々に支えられ助けをいただいた結果だと思っています。現在は、港湾関係の公益法人に勤務していますが、ここでも民間会社とは異なる新たな出会いがあります。今後もこうした出会いを大切にしながら、技術者としてより大きく成長していきたいと考えています。



次号は、高橋 功さん（建設部門）